

(1) 幸田延の妹、のちの安藤幸子。

また衆議院議員島田三郎の演説は次のとおり。

#### 四 この時期の演説

まず、明治二十四年二月十一日の紀元節祝賀式に行われた演説を挙げ  
る。『音楽雑誌』に掲載されたものである。

伊澤修二校長の演説の大意は次のとおり。

今日は紀元節の祝日に當り諸君と共に此愛度霽々たる聖世に遭ひ  
て祝歌を奏せしは欣々は堪へず就ては紀元節に因しみて音楽の紀元  
を少しく述へんとす最も本日は衆議院議員島田三郎君の演説せらる  
ゝあるを以て余は尤も簡短に之を述へんとす抑も音楽なるものは國  
の分野を問はず何れの國々にも皆あるものなれとも吾日本の如きは  
最も遠く古代に在り或る説には吾國樂の創めは神代に於て天照大神  
の窟に隠れ給へたる時八百万神御神樂を奏し鈿女の命が茅纏の綯  
を持ちて舞ひしに創まるとも傳ふれ恐らくば音楽は世界の創めと共に  
在るは疑ふに足らざるべし古事記にも記す如く神武天皇の歌は大  
概軍歌多く又皇妃を娶る時に用ひたるなり其中の卷にある兄猾を討  
する條の(伊賀)云々は昨年已に詳述せり

昔神武天皇の代には此日本に尾のある一種の變なる人種八十建ありて忍坂の  
大室に穴居せり天皇之を征討するに悩ませられ即ち策を設けて八十建を饗し  
八十膳夫をして一人毎に八十建に侍せしめ一齋に歌を唱ふと共に一時に此の族を皆捕獲せんことを示し合せて悉く之を捕獲せりといふ云々

今日紀元節の式を行ふに際し校長よりも一場の演説をせよとの委  
囑もあれば私は音楽の事に就ては恥づべき經歷を有する者なれとも  
或は私の考が御参考ともなれば幸なり而して世の音楽に如何なる思  
想を懷く者あるかを觀察すれば世人は唯一種無益の娛樂に過ずと思  
ふ者あれども決して然らざるなり茲に其疇昔を温れば洋の東西を問  
はず何れも音楽は教育上に缺く可からずとなせり然るに我國封建時  
代に於ては算術及音楽の思想は教育の範圍外に措たり古の教育は先  
づ四書五經を読み夫より史記左傳等を讀み之を解讀するのみにして  
學者には音楽の思想を懷く者殆んどなき如く實に放棄して之を顧み  
ざる故に全く俗間の一方にのみ行はれたり世の開明に赴くに從ひ明  
治六年學制を布くに當り歐洲の教育書を翻譯せし時音楽を普通學科  
の中に加へたれとも其緊要を感せし人は無かりし當時私は伊澤君と  
机を並へて時務を論せし事ありしが伊澤君は師範學校長の職にあり  
て音楽の擴張を主張されたり其後私は歐洲に渡りて彼の國の文物を  
實驗せしに音楽上の事に就ては尤も感ずる所多かりし今其經歷を引  
證して音楽の必要を論せんとするに即ち音楽の教育上に關する事と  
音楽の風俗上に關する事の二要点あり

昔支那にて孔子の弟徒三千人の中六藝に通ずる者七十二人ありたり此六藝といふことに一は書經詩經易經禮記春秋樂記の六經と云ひ  
一は禮樂射御書數の六藝と云ふ二説あれとも私は六藝を適當と思ふ  
而して支那の數學音楽は教育上に最も立派なる位地を占めたり猶能  
く其源を温ねれば堯舜の世に専門の音楽の教育者を置きしは明なり

人間か世界に成立ちたると同時に音樂の種類は成立てり然れとも之が律を作り樂器に合せたるは黃帝の鳳鳴を聞いて笙を造り伶倫嶰谷の竹を以て笛を造り黃鐘の律に合せり當時已に専門の樂政を執りし職を置き事業家才能家も音樂を以て天下を誘導せり舜五絃の琴を造り南風の薰を誦して天下治まる先王の天下を治むる禮樂刑法の四を以てす支那の古代にありて斯く迄禮樂を重んじたるに拘はらず禮の尊ふべきを知て樂を實事に施さざりしは所謂正しき音樂が成立たらずして俗曲が天下を横行したる弊なり利器は大功を奏する代りに其害を醸すも亦大なり音樂も之れと同じく正雅ならざる俗曲の風俗を亂し大害を與ふる事實に恐るべきなり不幸にも我國古代の雅樂は獨り朝廷の儀式にのみ行ひ一般の俗間には俗樂のみ行れたれば害を恐れて音樂を教育上に用ひざりしなり中には有志者ありたれとも力乏しく世の勢を變ずること能はざれば實行上には顯はれざりし元祿時代の儒者に荻生徂徠なる人ありて頻りに音樂の緊要を説き大宰春臺も此事を論したるは百七十余年前なり

凡そ人あれば感情あり感情あれば音樂あり彼の希臘ギリシヤは古より美術の思想發達し十九世紀の開化か段々布演して今日の隆盛を致せり亞典アテンの政事家ゾロンは音樂を以て治國の要具としピサゴラス、プラトウ、アリストートルの時代には体操、音樂の議論強く特にプラトウは音樂は最も撰ふべきものにして其採るべきと捨つべきとの二類に注意すべし其短音階の悲哀なるものは成的之を捨て長音階の勇壯活潑なるものを採用すへき事に最も注意すへしと論せり音樂の勢力の著しき知るへきなり凡そ美術中に音樂程普通の性質を具へ賢愚貧富貴賤老幼の差別なく一般に効力の通するものなし小兒が繪畫彫刻に

感動するか音樂に感動するかと云へは其音樂たることは明なり又年齢によりて考ふるも人心を感動せしむるは音樂に及ぶものなし孔子は樂を聞て三月肉の味を知らずと云へり又梁上の塵を動かし行雲を停むるとも形容せり感動を與ふること深き知るへきなり又音樂は貧富貴賤に通して尤も効力あるものにて上は朝廷の宴會廟堂の祭祀に又軍歌に又一家團樂の奏樂となりて上より下に及ぶものなり故に此音樂をして風俗を亂す音樂たらしめば其弊害甚しく遂には國勢を衰頹せしむるに至らん

凡て人間は適當に身体を利用し適當に心を養はざるべからず一張一弛は文武の道にして人間の身体も又斯の如し支那春秋の時鄭國に子産と云へる賢相ありて能く隣國の侮を防きしが嘗て朝廷にあるよりは野外にある方却りて名案大策を考へ得ると云へり然らば快樂は社會必要的の者なり必要的の者にして勢強き者は音樂なり此の音樂をして人心を正しくし身体を成長せしむることに用ゆるは教育上必要なることなり英國のチエスタフィールドは其子にバイオリンを習ふ事を禁したり其後アルベルトは勞働社會をして必要の樂しみを稟けしめんとて専ら此事に意を盡したり爲めに國人は其記念として音樂堂を建設せり昔しは貴族チエスタフィールド其子に音樂を習ふことを禁し今日は至尊と位置同しき人をして獎勵せしむるに至りしは必竟理論上實地上社會の勢を一變したる証據なり然らば賢愚貧富の別なく普通の性質を有つ處の音樂をして適當なる進路を取らしむる事は政治上必要なりと考ふ

日本にては實際上實事上其音樂によりて力ありしは薩摩の新納武藏守か「肥後の加藤か來るならば焰硝肴に團子まうす夫でもきかす

に來るならば首に刀の引出物」と云ふ歌を國內の少年に歌はせて勇氣を鼓舞せり即ち頼山陽此意を譯して兵兒謠を作れり必竟薩摩の少年が氣力を惹起したるは此の歌の結果なり獨逸來因<sup>ちいん</sup>の成兵歌の如きは實に佛人をして來因の境を越さしめざるの傾勢あり獨逸聯邦か今日の結果は種々の原因あらんが來因歌及祖國歌の興りて力ありしは疑ふべからざることなり佛國の「マルセーユ」歌の如きは那拿翁三世政府は嚴禁せり是れ人心を激發せしむるの甚しければなり斯の如く音樂の志氣を鼓舞するは明なれば我日本に於ても正しき音樂を成立たしめば大に國を益するならん今迄我國に音樂の必要を知らざりしは元來の偏僻の致す所なり維新の際に最も美術的思想に乏しく此の上野の公園をして木を伐り地を拓ひて茶晶となさんとの評議ありしに或る西洋人の之を聞き嗚呼此松樹は僅かの年代に生長したるにあらざ實に惜むべき事なりと稱へられて其評議を停め今の樂しき公園とはなれり繪画彫刻は今日漸く世に重せらるゝに何故に音樂は無用視せらるゝか是れ從來の偏僻なる教育の余習と俗樂のみが行はれたる結果なり凡て無形のものを見ると云ふのは余程開けた人にあらざれば能はず今日音樂の必要を認むる者の少なきは怪しむに足らざるなり斯く今日迄我國の音樂は不幸の經歷にて充されしが後來は如何なる有様に成行くを考ふれば我日本は支那よりも音樂の成長は立派に行くべきを信ず支那古代の音樂は成長せず年を経るに従て衰へ歐洲は漸々成長し來りしは支那は古來屢々北方人種侵入して國內一般北人の勢力に壓せられたればなり音樂は柔かな言葉を出す所の土地に發達強くして朔北寒冽の土地には余り生長せず故に支那の音樂は我日本の如く揚々たる性質を受くること難し然るに日本の國

語は母音多くして流暢に活動する言語なれば人間社會に欠く可らざる快樂の元素たる音樂か日本の國語に於て成長せざる事なし假令從來の經歷に於て他の美術に劣るも後來大に望みあれば此事を擔任する諸君は一層盡力有んことを希望するなり

(『音樂雜誌』第六号、明治二十四年二月)

次は明治二十四年七月十一日の卒業式である。当日行われた順に、外山文学博士、校長心得神津専三郎、伯爵大木文部大臣の演説を挙げる。

外山文学博士の演説は前以て府下各社の諸新聞に廣告もありし事なれば此日博士の登壇するや満場の拍手が涌くが如く博士は徐に説き出して曰く

卒業生諸氏凡そ物事の輕重は見る人の心に大に由る事て有升るが如何なる學校の卒業生でも將來其任の重からざる者は非ず中に就て當音樂學校の卒業の如く其任の重きものは他には多く無き事と思はれ升る其譯は音樂は人間社會に於ては最も大切なるものゝ一でありまして音樂の善惡は國の人情風俗等に著しき影響を及すもので有ると云ふ事て有升る若し國の音樂にして不良ならんには如何程道德を唱へても何程學校で修身を設けても其結果は決して充分なる事を得升まい左れば今日我邦に於ては音樂の改良程大切なものは他には多くあるまいと思ふ若し今日の如く廣く猥褻の歌を唄はしめ廣く亡國の節を行はれしめんには學校にて修身科を何程厳しくするも道德の改良も氣質の養成も決して充分なる事能はざるへし故に今日に在ては音樂の改良程大切なる者は他には多く

有るまいと申すので有升若し明治の代に於て音楽改良のみ唯た一つが出来ざるも實に一大事業を奏したりと謂ふても宜しき程の事では無からうかと存します諸氏は即ち今や音楽上の修業を卒へ是より社會に出て此重大なる任に當らんとする者なれば今日は諸氏の身の爲に實に祝すへき時なり又國家の爲めにも甚た喜ふへき時なり故に其祝意を表する爲め聊か御饒の印までに一篇の拙き文を讀まするか今日諸氏に對して祝意を表するの榮を得たる次第を簡短に述べれば去る頃文部大臣閣下より招れし宴席に於て當時音楽校長たりし伊澤修二君が四方山の話の序に本邦には未だ演説法の開け居らざる事を之を研究するは音楽校杯が最も適當の場所なるべきや杯と例の熱心を顯はして説れしが私も斯ることは聊か研究し居るか抑も我邦には未だ演説法發達し居らざるのみならず書物を読むの法も至て發達し居らぬ様に思ふ我邦にて書を讀むは論語でも中庸でも新聞でも八犬傳でも彌次喜太でも皆一樣に妙な高調子で唄ふか如く伸るか如くに讀むの習慣なるが書物も夫々適當なる讀方を以て讀まねはならぬ事と思ひ聊か研究せし所を先年明治美術會總會の席に於て試みしが其後も少しは研究せし故何時か好き折を得て御聞に入れ御批評を願ひたしと申したる所幸ひ七月十一日の卒業に述べよと伊澤君の御所望に依て即ち夫を當日祝詞の代りに述ふる事に致しますと御約束せり然に後數日を経て伊澤君は校長の任を解かれし故私は神津校長心得に此事を御話し申したる所其約束の通に致し呉れよとの御意で有ましたに依て即ち今日諸氏を祝するの榮を得たる次第で有まする此事情を御諒察ありて拙き文の朗讀を御聽あらん事を願まする是迄は演説の前置に

て是より(忘れがたみ)てふ安政の地震記を「風の音さへ」云々と或は壯快に聲を張り揚げ或は悲哀に身を振はせ緩急疾徐朗讀の妙自ら其態に表はしつゝ「深きは親の恩惠にて忘れ難きは母の愛」と讀りて檀を下られしが傍聽中には種々に評し合へ成田屋と褒め又は川上音次郎の演劇と一對なる外山座を見た様だと評したる人もありたり

〔音楽雜誌〕第十一号、明治二十四年七月

#### 校長心得神津專三郎の演説

本日ハ当校第四回卒業證書授與式挙行ニ際シマシテ大臣閣下朝野ノ貴紳及貴婦人其他滿堂ノ御臨場ヲ辱ウ致シマシタルハ本校ニ於キマシテ無究ノ榮光ト存シマス本日當校卒業ノ生徒ハ本科卒業十一名ト預科<sup>(マ)</sup>を卒テ其證明書ヲ附與シマスル者十一名ト選科修業證明書ヲ附與シマスル者一名トテアリマスル本科卒業生ハ師範部專修部ト二種ニ分レテ居リマシテ師範部ハ二名專修部ハ九名テアリマスル此中師範部生徒ハ去ル明治廿一年九月廿七名入學ヲ許シマシタル其二名デアツテ即チ預科<sup>(マ)</sup>本科ヲ通計シテ三ケ年ノ課程ヲ卒ヘタル者テアリマスル專修部ハ明治廿年春秋兩度ニ入學ノ三十七名ト明治廿二年一月東京高等女學校卒業生一名ニ臨時本科へ入學ヲ許シマシタル者トヲ合セテ三十八名ノ内九名テアリマスル此專修部生徒ノ入學致シマシタル時代ハ尙本校モ音楽取調掛ト稱シマシテ文部省總務局ノ中ニ屬シテ居リマシタル事デアツテ即在學稍四ケ年餘ニ渉ル生徒テアリマスル

本日卒業ノ本科生在學中ニ大關係ヲ有シマスル件ハ本校ニ於キマ

シテ新ニ歐洲ヨリ招聘致シマシタル奥國音樂教師ヂツトリヒ氏ノ來航致サレマシタル此一事デアリマスル此件ハ去ル明治廿一年ノ秋テアツテ本日卒業ノ専修部ノ生徒ハ即チ此秋ヨリ専門樂器ヲ專攻致シマスル學期ニ臨ミマシタルノデ最初ヨリヂツトリヒ氏ノ熱心ナル教授ヲ受ケマシテゴザリマスル即専門樂器ニ於キマシテハ是カ始ヨリ教師ノ鍛鍊ヲ經マシタル始<sup>「マヤ」</sup>メテノ卒業テアツテ本校カ東京音樂學校ト爲リマシテヨリ第四回ノ卒業生テアリマスルマタ本日ノ式ハ當校舎カ昨年文部省ヨリ交付ニナリマシタ以來第一回ノ卒業證書授與式ニ當リマスル

以上ハ本日卒業ノ生徒在學中ニ關スル報告ノ大意テアリマスル是ヨリ例ニ依テ一言卒業生諸氏ニ致シマスル諸氏ハ只今申シタル如ク從前ノ卒業ニ比スレハ實ニ好機會ヲ得テ業ヲ修メラレ加フルニ平日勉強ニナリマシタル功カ著ハレテ遂ニ今日ノ盛榮ヲ荷フニ至リマシタルハ獨リ諸氏ノ幸福ナルノミナラスマタ本校ノ幸福テアリマスル方今諸氏カ既ニ得ルトコロノモノハ諸氏カ當得ヘキ蒼溟ノ一滴ニスキシノデ殊ニ音樂ハ品行ト學藝トヲ併セ修ムルニ非レハ身ヲ立テ名ヲ成ス事ハ出來マスマイ故ニ諸氏ハ益茲ニ勵精努力シテ益帝國々々有用ノ器ヲ成シ益今日ノ光榮ヲ發揚セラレン事ヲ企望致シマスル

〔手書き〕(『東京音樂學校明治二十四年度學事年報』)

#### 伯爵大木文部大臣祝詞

凡そ人の心情物に感して動けば則ち聲に形れて歌謠吟哦と成る隨て清濁高低の調を生ず其音を比合して之を樂器に施し手の舞足の蹈むを知らざるに至る此狀即ち音樂は人間自然の性情に出るものに

して人類が世界に現出すると同時に相伴ふたるものたるは明なり但人智の異なるあると習俗の同しからざるとにあり正邪雅俗巧拙整否の差異あるは免れざる所にして而して此差異たるや仮令毫釐に外ならざるも其誤必ず千里を致すものなり況んや相去る甚た遠きに於てをや

故に人智の發達と相伴ふて音樂亦進化せざるべからざるば社會必要の事にして明治維新世運漸く進み人智益々開くるに及んで舊態古式の時に適せざるものなきに非ず俗謠鄭曲の改良を加へざる可からざるもの尠しとせず茲に於て當局者孜孜として之が講窮を怠らず遂に明治二十年本校設立に至り其業漸く緒に着き今や第四回の卒業生を出すに會ふ本校の目的は音樂師と音樂教員とを養成し併せて我邦音樂の改良上進を圖るに在り而して其改良上進決して永々の年月を待つにあらざれば期すべからざるなり故に卒業生諸氏は宜しく此責任に當るの覺悟なかるべからず今や諸氏は本日成業の光榮を博すと雖も諸子の前途亦甚遠きを銘せられん事を諸子其之を勉めよ

〔音樂雜誌〕第十一号、明治二十四年七月

次に明治二十五年七月九日の卒業式に行われた、村岡範爲馳校長および大木文部大臣の演説を挙げる。

#### 學校長理學博士村岡範爲馳氏の演説

本日は本校第五回の卒業證書授與式を執行するに際し朝野の貴顯貴婦人は炎暑をも厭はず來會を恭くせり小官は本校の教員卒業生一同に代りて深く之を謝す

今や卒業生に卒業證書を授與するに先ちて一二の報告を爲さん  
に學事前學年と異なる点を擧ぐれば二年生及三年生に音樂的性理學  
を課したり是は昨年發布せられたる小學校教則大綱第十條に唱歌は  
耳及發聲器を練習し云々の箇條あれば本校の卒業生は耳、咽喉、口  
洞等の構造其攝生法及聽音發音の學理等を知らしむる事必要ならん  
と信し試に之を授業せり又唱歌は常に和歌と相伴ふものなれば生徒  
に充分和文學に通せしむるの必要あるを以て從來授け來りし和文學  
の外に猶ほ一二の和歌講議等を以てせり本年當校に於て爲せる事業  
は本邦樂曲調査の事、風琴樂譜出版の事、小學唱歌集及高尚なる複  
音唱歌集編纂の事、本校の編纂に係る唱歌集の歌詞修正の事、祝日  
大祭日歌詞及樂譜撰定の事、是は小學校等に於て祝日大祭日の儀式  
を執行する際唱歌すへき歌詞樂譜の件也恐れ多くも我帝室の大禮に  
關する事なれば鄭重に之を選定すへき旨を以て文部大臣より本校に  
命せられたれば目今謹撰中なり右の外研究せるは本邦の音曲に和聲  
を附する事なり是は本邦の樂曲は主として單音なるか之に和聲を付  
して更に其趣味を増加し以て本邦の音樂を改良せんとするの計畫な  
り從來之に従事する人間々ありと雖も其業極めて困難にして和聲を  
付したるものは多くは日本の趣味を失ひ獨り西洋人の嗜好に適せさ  
るのみならず又日本人の耳をも満足せしむる事を得ず然るに過般來  
本校の教師デットリヒ氏に依囑して調和せしめたるものは往々聞く  
可きものあるか如し本日の演奏中にも同氏の調和に係る三箇の俗間  
に行はるゝ樂曲あり即ち第一「地つゞき」是は九州地方に行はるゝ  
曲にて地形を固むる時唱ふ音曲の一部なり「第二琉球ぶし」にて是  
は支那流の曲なれとも本邦人の耳に隨分浸み渡りたるものなり第三

は「目出度」なる曲にて祝賀の席に於て唱ふるものなり右三曲共に  
後刻演奏せしむへければ謹んで高評を賜はらん事を乞ふ右の諸項は  
皆目今調査中にて未だ完結せるものなし本年は師範部に卒業生なく  
今將に卒業證書を授與せんとする所の生徒は專修部卒業生五人なり  
其中洋琴卒業生三人「バイオリン」卒業生二人なり學校長は此五人  
の諸子に向ひて一言せんとす僅々たる五人の諸子の爲めに朝野の紳  
士貴婦人は焦くか如き炎熱も厭はずして此廣大なる廬室に殆んと立  
錘の地なき程臨席せられたるは實に諸子か積年螢雪の效果にして無  
上の榮譽と云ふへし校長は毎々諸子に告げし如く人の最も嗜好する  
所の音樂なるものは教育上風教上實に著大なる勢力を有するものな  
り音樂と伴ふ所の周南召南は以て文王の徳化を視るに足將仲子狡童  
の如きは以て鄭國の淫風を察するに足る音樂は能く猛惡の人を温和  
にし又能く怯懦の人を奮起せしむる等其效擧げて數ふるに暇あらず  
孔子曰く風を移し俗を易ふるは樂より善きはなしと故に支那に於て  
は伏羲神農の古代より既に樂典の官を設けて天子以下士庶人の子弟  
を教育し周の世の盛なるに至ては詩書禮樂射御書數なる諸科を學校  
に設置し就中音樂が殊に重要な學科なりし事は孔子の一二の語を  
以て之を徵するに足る曰く樂は倫理を通するものなり曰く禮樂は斯  
須も身を離るへからず曰く詩に興り禮に立ち樂に成る等の語の如き  
是なり西洋に於ても音樂は古昔より羅典語宗教と共に教育の必要科  
なりしか今世普通學の諸科其數益々増加するの今日に當りて音樂は  
依然舊時の價值を有てり我日本國に於ても數十年來音樂は普通教育  
の一科となり政府に於ては當東京音樂學校を設置して善良なる音樂  
教員及音樂師を養成し當校卒業生をして風を移し俗を易ふるの先導

者たらしめんとす卒業生の任亦重くして道遠しと云ざるへけんや本日唱歌すへきの歌に曰く「振延て、いぎ分けん、嗚呼、行手の道、嗚呼々々、行手の道峻しとも、岨しとも、何かは厭ふへき、高き嶺、深き谷、何かは難むへき、其稜、其先導、今日の此卒業證書」と今學校長が諸子に授與せんとする所の卒業證書は諸子か風教を矯正するに適當なる音楽上の諸科を學修せし事を證明するものなり學校長は諸子か奮て國家の爲めに其業務に従事し以て本日の光榮に報ゆる所あらん事を希望す

#### 大木文部大臣祝辭

本日東京音楽學校生徒に卒業證書を授與するに當り茲に和氣霽然たる式場に臨みて聊か所思を述ふるを得るは予か深く喜ぶ所なり抑々音楽は人生自然の性情より發する者にして古今東西の別なく其理皆一徹に出づ而して其用たるや人心を融和し志氣を鼓舞し徳性を涵養し國風を淳化するものなれば古來之を以て邦家政務の要具となせしは故なきに非ず蓋し本邦の音楽あるや其來ると甚た遠しと雖も之を學理に考へて改良し之を教育に加へて實施せしは寔に輓近に屬するに拘はらず其成績の觀るべきものあるに至りしは予が満足に堪へざる所なり

今諸子は本校陶冶の恩を受け多年螢雪の苦を積み茲に成業の榮を亨くるを得たるは諸子の爲め本校の爲め慶賀措く能はず然れども諸子の前途たる甚た遼遠にして其責任亦極めて重きものなり故に諸子は内益々徳性を養ひ善行を修め外音楽の改良と普及とを圖り以て我國風をして益々敦厚ならしめんことを期せざるべからず諸子其れ之

を勧めよ、

〔音楽雜誌〕第二十三号、明治二十五年八月

次は東京音楽學校が高等師範學校附属となる直前の明治二十六年七月八日の卒業式の演説である。村岡校長は、同校が九月一日から高等師範學校附属となることに触れ、この改革のために落胆することなく、わが国の音楽の發展に尽すよう励まし言葉を贈った。演説の半ば過ぎに、西洋音楽を基準として、音楽の進歩の段階について述べられる件がある。これは初めての本科生を送り出した二十二年の卒業式における伊澤校長の演説と通じるところがあり興味深い。

#### 東京音楽學校校長理學博士村岡範爲馳氏演説

宮殿下各國公使閣下及朝野ノ紳士諸君ヨ日本日ハ本校第六回ノ卒業證書授與式ニシテ專修部及師範部ノ卒業生諸氏ハ多年刻苦勉勵ノ結果トシテ最モ貴重ナル卒業證書ヲ受領スルノ光榮ヲ有スルノ吉日ナリ小官ハ今此式ヲ舉グルニ當リ例ニ依リ東京音楽學校本年中ノ概況及後來ノ希望ニ就キ聊カ一言セントシ

本校ハ汎ク音楽専門ノ教育ヲ施シ善良ナル音楽教員及音楽師ヲ養成スルノ目的ヲ有シ其生徒ハ各自ノ志願ニ係ル者ト各府縣廳若クハ諸學校ノ特撰ニ係ル者トノ二種アリ然ルニ從來ハ主トシテ各自志願者ノ入學アリテ各府縣廳ノ特撰ニ係ル者ハ明治二十二年山形縣ヨリ僅ニ一人ノ選抜アリシノミナリシガ昨年ハ文部省ヨリ各府縣ニ通牒アリテ知事ヨリ特撰生ヲ選抜派出セシムル事ト爲レリ其主意タルヤ目今普通學上音楽ノ良教員欠乏セルニ付尋常師範學校中學校ノ卒業生又ハ授業上既ニ經驗アル者ヲ本校ニ入學セシメテ其欠ヲ補フニ在

り來ル九月モ亦昨年同様ニ募集スル事ト爲レリ勿論各自ノ志願ニ出ルモノハ通常ノ通募集スルモノトス又本年中學科及規則等ノ變更ハ本科二年ニ音響學ヲ科シ且一般ニ文學ノ時間ヲ増加セシ事ナリ音響學ヲ科セシハ通常ノ音樂理論ノ外ニ稍高尚ナル學理ニ通ゼシメンガタメニシテ文學科ヲ増加セシハ後來教員タル人ヲシテ獨リ音樂ヲ教授シ得ルノミナラズ又作歌ノ力ヲモ備ヘ且文學上ノ教授ヲモ擔任スルノ能ヲ有セシメンガタメナリ校則ノ上ニ於テハ試業規則ヲ改正シ且病氣ノタメ數ヶ月間登校スルコト能ハザル者ノタメ休學規程ヲ設ケタルノ件ヲ重要ナルモノトス又本年中本校ノ事業ニ就キテ一見スレバ先ツ昨年來着手セル小學唱歌集ノ改正及改正小學唱歌集ノ解釋脫稿セルモ文部省ノ方針ニ於テ稍々變更セル所アルガタメ未ダ之ヲ世ニ公ニスルコトヲ得ス次ニ前校長伊澤修二氏ノ事業ヲ繼續セル筆曲集二編三編モ既ニ調査ヲ遂ゲタリ是レモ當分出版ヲ見合セラレタルカ是等ハ方針ニ大ナル關係ナキコトト信スルヲ以テ不日出版ノ運ニ至ランコトヲ希望シ小學唱歌集風琴ノ調モ又同様ナリ其他高尚ナル諸重音唱歌平易ナル兒童唱歌等多數製作セルモ未ダ之ヲ編帙スルノ暇ヲ得ズ本年ハ又一昨年來文部大臣ノ命ニ依リ着手セル祝日大祭日儀式用ノ歌調樂譜ノ調査ヲ終ヘ之ヲ大臣ニ申報セリ其ノ發表ハ近キニアルベシ右歌詞ノ解釋ハ作歌者勝伯爵始各作者ノ撰ニ係ル者及ヒ樂譜ノ和聲ハ本校ノ調査ニ係ルモノ脱稿ニ付之モ亦不日發表アラシムコトヲ希望シ本年ハ又本邦音樂ノ實況ヲ外國ニ示スノ好機會ヲ得タリ即チ米國「コロンプス」博覽會ニ本邦ノ雅樂能樂其他ノ俗樂及西洋ノ諸樂器ヲ擬製セル者等其説明書音樂書類音樂上ノ論文數種ヲ出セシ件是ナリ

本年ハ又本校ノ生徒相謀リ學友會ナルモノヲ組織セリ其目的ハ生徒ノ智徳ヲ增進シ相互ノ交誼ヲ厚クスルニ在リテ毎月一回談話會ヲ開キ時々遠足會ヲ催シ又會員中ニテ音樂會ヲ催シ折々ハ公衆ニ對シテ音樂演奏會ヲ催シ等ノ事ヲ爲セリ昨年十一月二十七日及本年二月十九日ヲ以テ催セルモノ即チ此音樂演奏會ナリ外ニ又六月十一日ヲ以テ學友會男子部演習會ヲ催セリ是レ生徒既得ノ學業ヲ公衆前ニ演シ其實用上ノ經驗ヲ試ミルノ意ニ出ルナリ又本年ノ卒業ハ專修部ニ於テ四人内男三人女一人師範部ニ於テ六人内男二人女四人合計十人ナリ豫科卒業生ハ廿三人内男十人女十三人ナリ偕テ之ヨリハ當校後來ノ事ニ就キ小官ガ希望スル所ヲ述ントス先月二十九日ヲ以テ發表セラレタル如ク東京音樂學校ハ來ル九月十一日ヨリ高等師範學校ニ附屬スルコト爲レリ此事タルヤ學校ノ職員生徒ヲ始メ局外ノ人ニ至ルマデ文部省ガ音樂ヲ見ル事從前ヨリ稍輕クナリタル如ク信スル者アルガ如シ然レトモ余ヲ以テ之レヲ見レバ決シテ然ラズ此度ノ改革ハ文部省ガ音樂ヲ重ンセラル、ノ殊ニ大ナルコトヲ證スルニ足ルモハ、ナラント信ズ其故如何トナレバ政費節減ノ必要アル今日ニ於テ實業教育ニ熱心ナリトノ呼聲高キ現大臣ノ事ナレバ素人ノ目ニハ泰平ノ贅澤物ト見ユル音樂學校ノ如キハ或ハ廢止セラル、ナラント豫想セシサヘアリ然ルヲ東京音樂學校ハ其儘之ヲ高等師範學校ニ託シ反テ實業ニ直接ノ關係ヲ有スル主計學校ヲバ廢止セラレタリ此正反對的ナル廢合ヲ以テ之ヲ見レバ文部大臣ノ音樂ニ於ケル意見ハ甚厚キモノト言ハザルベカラズ故ニ音樂海ハ決シテ此度ノ改革ノタメニ落膽スル事ナク益々改良ヲ圖ラレンコトヲ希望ス嘗テ小官ハ音樂ノ必要ニ於テ聊カ信ズルトコロアリシヲ以テ今日迄敢テ當校々長ノ重任



ニ當リシガ今ヤ將ニ其任新當局者ニ讓ラントスルニ際シ兼テヨリ考案シツ、アル音樂改良ノ意見ニ就キ其大要ヲ述ベントス來賓諸君幸ニ尙ホ數分間ノ時ヲ假シ賜ハラントコトヲ乞フ

抑々音樂は有形の理學と無形の感情とを兼ねるものなり音樂に用ふる或音と他の音との關係即ち宮商角徵羽の音程の如きは度量衡を以て測定するを得べし是れ音樂の有形なる所以なり物の是非善惡喜怒哀樂等は之を測定するの尺度あることなし是れ音樂の無形なる所以なり有形なる理學の西洋に高くして日本に低きは争ふべからざる事實なり無形の感情を無理に變せんとするの誤れることも亦多辨を俟ずして明なり左れば感情に需むる所は之に満足を與へ學理上不完全なる所は之が改良を圖るは蓋し事の其宜きを得たるものならんか故に小官は常に折衷的の改良を圖らんことを希望せり日本の音樂を改良せんと欲するものは先日本音樂と西洋音樂とは進歩の度に於て如何なる關係ありやを明にせざる可からず熟々西洋音樂の進歩を考ふるに凡そ三級の階級ありとす即ち音樂の最も幼稚なる時代は單音音樂の時代なり例へば數人合唱するも數個の樂器を合奏するも皆同音又は第八音と合して奏する者なり是は此頃東京に來れるサミ殿にもホツテントツテンの黒奴にも出來ることなり單音音樂は音樂進歩の初期なり之に次ぐ所の第二期は複音音樂の時代なり即ち二個或は數個の音曲にして拍子「リズム」同一なるものを合奏する時代なり是は最初より合奏の目的を有せずして作りし曲も拍子「リズム」に差等なきときは同時に奏して能く合ふこと故に宴會等の際之を試るときは一段の興味を添ふることなり漸々人の注意を惹き起し從て追々複音の見込を以て作曲する者あるに至れるなり日本に於て六段の

平と替手を合せ又は組の表裏中等を合奏するが如き是なり此第二期に於ては最初は唯二曲又は數曲の拍子と「リズム」か合て亂れざるの一事のみにて合する所の音即同時に鳴る所の音は聽者の耳に如何なる感と與ふるや否に至りては幾と問はざるなり然るに複音の曲を聞て聽者の嗜好追々高尚となるに従ひて唯拍子と「リズム」か合ふのみにては承知せざる様に成行くなり拍子と「リズム」のみならず同時に耳に入る音が快き感覺を與ふるやうに調合するの希望を生ずるなり是れ複音時代の音樂が進化して和聲的の時代と成れる所以なり歐洲に於て今日行るゝものは即ち和聲的音樂にして音樂進歩の第三期に當るものなり左れば草昧の時代より今日に至るまで音樂の進歩には三期あり單音期、複音期、和聲期、是なり此後進歩して如何成行くかは勿論知るべからざるも兎に角西洋音樂が此順序を踏來れることは明なり音樂の進歩に右の順序より外の順序ありやなきやは勿論問題なり然れども是順序は多分歐羅巴外の諸國も踏來りたることと信ぜらる即ち日本の如きは余猶主として單音的音樂を用ふるも既に段物の平及び替手或は組の表裏中奥の合奏の如きものありて既に複音音樂の端緒を開きたるものなり而して余は日本音樂にして今後獨立に進歩せば即外國音樂の干渉を受けずして進歩する時は數百年の後は同じく和聲的音樂に變ずることを信するなり果して然りとせば西洋音樂は第三期に位し日本音樂は第一期と第二期の中間に居るものなり此三個の音樂時代の差は獨り單音複音及和聲のみにあらず樂用に用ふる所の音の數及一の音より他の音に移行く音の飛方に差等あるなり即音階なるものに不同あり而して雅樂俗樂等の五聲に馴れたる耳には西洋七聲の樂は悟り難きなり是れ譬へは兒童が

鹽砂糖の味は能く之を辨ふことを知るも未だ唐辛胡椒等を味ふ能はざるか如きものなり若し此説にて誤らざるときは日本音楽は音楽上の一前に於ても（風教上の改良に關係なく論ずるも）大に改良を要するものなり今假に西洋の音楽が最も進歩せるものと看做して之を直接に輸入せんには如何なる方法を以てせんかと云ふに一番捷徑は人民に成るたけ屢々西洋音楽を聞かすむるの機會を興ふるに在り且即東京音楽學校の如きものを多數設置き人をして隨時之を聞くの便利を得せしむるに在り何んとなれば音楽は聞馴れざれば分らぬものなり全く音楽には素人なる日本人にても自國の音楽は西洋音楽より分り易し是れ平生道路を往來するも又は自宅に在るも三味線の音や角力甚句等は絶えず聞馴れ居るが故なり即日本人の耳には日本の音階（即ち音の飛工合）が自然染渡り居るが故なり仍て前にも言ふ如く西洋音楽を世人の嗜好に適應せしめんと欲せば先づ人をして屢之を聞くの機會を得しむるに在るなり又第二の方法は學校に於て進歩せる端正なる音楽を學ばしむること是なり是れ文部省が既に實行せる所にして自今學校唱歌は益々普及しつゝあるなり若し學校唱歌か尙廣く普及し且改良して（現今小學の唱歌は甚拙なるもの多きに居る）之を學びたる兒童が成長する時は彼俗間に行はるゝ猥褻の馬子歌船歌田植歌機械歌木遣歌等も追々端正なる唱歌となること現今西洋の民歌及び民様歌の如き有様に至る可し斯の如くなる時は所謂鄭衛の音を變して周南召南と爲したるものなり果して然らば音楽の効力は決して兵力或は金力に譲らざる可し以上は西洋音楽を直接に輸入する方法なるかは第一期第二期の間に位する音楽より一足飛に第三期に移らんとする方法なるが故に勿論少しく無理なる所ありと

す特に音楽は無形の感情に關係あるものなれば日本在來の音楽執分け人情に近き俗樂を改良して漸々第三期に進ましむるの方法を攻究すること甚緊要なることならんと信ず故に余は嘗て單音なる日本の音楽に和聲を附して和聲的音楽に變ずることを務めたることあり是は一昨年來當校教師ヂトリヒ氏に託して研究せしめたることなるか中々難題にして到底授業の傍に爲し得べき事にあらず現今僅に六曲を得しのみなり若し之を繼續して其効を奏せしめんと欲せば更に數名の外國音楽師を聘して單に之のみに從事せしめざる可らず是れ勿論經濟の許さざる所なり又俗樂の改良は獨り音楽上の改良に止るべからず其歌の言葉も改作し又は端正なる言葉に新曲を附せざる可らず現今世上に行はるゝ箏曲、清元の猥褻なる音曲は公衆を集むる寄席等に於て禁すべきなり既に法律上猥褻なる繪畫に對しては其制あり素と音楽に於ける其必要は決して繪畫に譲らざるべし箏曲を西洋の樂譜に執り且之が歌言葉を改正する事は當校に於て前校長の時より實行し來れることなれども授業の余暇を以て爲すことなれど調査遅々たり是等の事業は別に其掛を置き着手するの價值あるものならん

右の外尙陳述したき事項もあれども是より尙多數の演奏もあることなれば右大体の希望を述べて來賓諸君の高評を乞ふ  
終に臨みて殊に卒業生に一言す諸君は今日宮殿下各國公使閣下其他内外紳士諸君列席の前に於て最も貴重なる卒業證書を受領するの光榮を有せらる諸君は是より社會に出て本校に於て學修せる藝能を實地に應用するに當り常に教育に關する勅語の御主旨を奉戴し風を移し俗を易ふる音楽の先導者と爲り國家のため自身のために力を盡

し以て本日の榮に報いられんことを希望す

〔音楽雑誌〕第三十四号、明治二十六年七月、同第三十五号、明治二十六年八月

#### 牧野文部次官祝辭

本校此ニ第六回ノ卒業式ヲ舉行シ諸子積年修業ノ成績ヲ表彰スルニ當リ大臣自ラ臨席スルコト能ハズ茲ニ代テ蕪辭ヲ陳フルハ本官ノ深ク榮トスル所ナリ

夫レ音楽ヲ學理ニ徴シ其改良發達ヲ圖リ廣ク之ヲ社會ニ施シテ以テ衆人ノ徳性ヲ涵養シ志氣ヲ鼓舞スルハ教育上最モ緊要トスル所ニシテ其目的ヲ達シルハ實ニ諸子向後ノ責任ナリ而シテ之ヲ普通教育ニ施スニ至テハ徒ニ高尚ニ鴉スルコトナク能ク生徒ノ性情ニ適セシメ之ヲシテ容易ニ感化セシメンコトヲ勉メザル可ラズ是レ余ガ諸子ニ注意ヲ促ス所ナリ

諸子ヨ音楽ヲハ人ヲ感化スルノ具吾身ハ人ヲ感化スベキ重任ヲ荷ヘルコトヲ頃刻モ忘レズシテ益々其業ヲ研キ以テ音楽ノ品位ヲ高メ一層其功用ヲ發セシメンコト是レ余ガ尤モ諸子ニ望ム所ナリ

〔音楽雑誌〕第三十四号、明治二十六年七月